



修辞のネットワークにおける音反復レトリックの分布

小松原, 哲太

(Citation)

日本認知言語学会論文集, 12:39-51

(Issue Date)

2012

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008828>



修辞のネットワークにおける音反復レトリックの分布

小松原 哲太

京都大学大学院

komatsubara@hi.h.kyoto-u.ac.jp

1 はじめに

ある音の反復は、音韻構造の類似性に基づいて認知される。たいていの言語使用では、音反復は避けられる。音反復が認知された場合、そこには反復の意図や言葉遊びが感じられることが多い。

- (1) 骨が細く、体が細く、顔は特更細く出来あがったうえに、取る年は^{あらそわ}争れぬ雨と風と苦
労とを吹き付けて、辛い浮世に、辛くも取り留めた心さえ細くなる^{ばかり}許である。

(夏目漱石「虞美人草」: 199)

(1)では、「細く」という語の連続は、明らかに意図的と思われる。また「辛い」という語の反復は、一方では世知辛いという意味で、他方ではやつのことだという慣用表現の構成部分として用いられることで、意味のギャップが生じており、言葉遊びの感覚がみられる。この種の音反復の認知に共通するのは、音韻構造が前景化されるということである。その反面、意味構造が相対的に背景化されるといえる。

修辞学では、音反復の認知にかかわるレトリックが詳細に分類されてきた。その中でも、調声表現やオノマトペなどの音象徴 (sound symbolism)、脚韻や頭韻などの押韻 (rhyme)、類音語接近や異義反復などの言葉遊び (wordplay) といった修辞現象は、言語学でも関心を集めてきたものである。本論文では、このうち言葉遊びの修辞をいくつかとりあげて、認知文法の観点から、その認知的構造を分析していく。また、それぞれの修辞の相互関係を考察していくことを通じて、音反復現象の基本的メカニズムについて考察していく。

本論文の構成は次のとおりである。第2節では、言葉遊びの認知過程の一般的特徴について述べる。第3節では、具体的な言語事例にもとづいて、言葉遊びにかかわる三つの修辞を分析し、修辞のスキーマを記述する。具体的には、異義反復、類音語接近、かすりについて分析をおこなう。第4では、前節で得られたスキーマの相互関係を、スキーマネットワークのかたちで明示する。第5では、言葉遊びの修辞的効果について考察をおこなう。

2 言葉遊びの認知過程

本節では、言葉遊びの認知過程に関する、一般的な特徴について述べる。2.1節では、音韻的な類似性にもとづく二語の連合関係の形成について述べる。2.2節では、修辞理解における意味の転換のプロセスをあらわす概念である、修辞作用について述べる。2.3節では、認知文法における言語音の概念化の取扱いについて述べる。

2.1 音韻的類似性による連合関係

ギローによれば、言葉遊び (wordplay) とは「言葉の音の類似が濫用されているすべての文を指す分類名」である (Guiraud 1979/1976: 7)。言葉遊びは、日常の言語コミュニケーションが朗らかにするだけでなく、言語の創造性にかかわる修辞現象でもある。言語音の類似は、一見すると強引とも思われる連想関係を築く。狭義の文法では不合理とも思われる一方で、音的類似はことばを強く結びつける。このことから生じる音と意味との剥離、二重性は、言葉遊びに共通する修辞性といえる。

本論文では、3.1節で異義反復、3.2節で類音語接近、3.3節でかすりを分析していく。ギローは、Jakobson (1981/1956) を援用して、言葉遊びを隠喩性と換喩性によって分類している。図1は、ギローによる言葉遊びの分類軸に関わる表である。これによると、本節でとりあげる三つの修辞は、すべて代入 (substitution) の言葉遊びである。代入の言葉遊びとは、連辞関係において、「与えられた位置において交換可能な」 (ibid., 8) 語によって成り立つ言葉遊びであり、隠喩 (métaphore) と関わる。本節でとりあげるのは、代入の列の、主に音声的、語彙的な側面に関わる修辞現象である。

	連 鎖 enchaînement	代入 substitution	挿 入 inclusion
音 声 的	連結 concaténation	語ろ合わせ homonymie	アナグラム anagramme
	連鎖韻 rimes enchainées	掛け言葉 équivoque	換字地口 contrepèteries
		地 口 calembour	字なぞ logogripes
語 彙 的	連結 concaténation	語いかえ synonymie	折 句 acrostiche
	妙なる死体 cadavre exquis	地 口 calembour	紀年文字 chronogrammes
		なぞ遊び charade	
語 彙 的 絵 文 字	自動記述 écriture automatique		語順転換 métabole
			分節詩 rimes brisées
	判じ絵 rébus	判じ絵 rébus	カリグラム calligramme
換 喩	連辞軸 axe syntagmatique	範列軸 axe paradigmatic	連辞軸 axe syntagmatique
	隣接性 contiguïté	類似性 similarité	移 動 déplacement
	換 喩 métonymie	比 喩 métaphore	音位転換 métathèse

図 1: Guiraud (1979/1976: 9-10)

この種言葉遊びの修辞性を理解するためには、音韻形式の類似にもとづく二語の一時的な連合関係を認知する必要がある。本節では、音声・文字を含む記号の形式を、広く音あるいは音韻形式などと呼ぶこととする。

(2) かつぱかつぱらった

かつぱらっぱかつぱらった

とってちってた

(谷川俊太郎「かつぱ」: 36)

(2)の第一行の意味論的な意味は、かつぱが盗んだというほどのものである。「かつぱ」と「かつぱらった」は、意味としては類似性はみられないが、音としては類似性がみられる。言葉遊びとしての修辞理解の点からは、平常の意味論的解釈は背景化され、「かつぱ」は「かつぱらった」のようである、という音韻的類似性を前景化する解釈が優勢となるといえる。ここには、直喩や隠喩と共通性がみられる。たとえば、彼女は小鳥のようである、という直喩表現は、意味的類似性を前景化する解釈がなされる。言葉遊びと隠喩や直喩は、二語が類似しているという判断の認知プロセスをとまなう点で共通している。ヤーコブソンは「言語の詩的機能は、等価の原理を選択の軸から結合の軸へ投影する」といった (Jakobson 1960: 358)。選択 (selection) と結合 (combination) は、ソシュールのいう連合関係と連辞関係にほぼ対応する。詩的機能は、連合関係

において類似性をもつ二つのものを、連辞関係へ投射する。言葉遊びは、音韻的類似性に基づく連合関係を、連辞関係として結合することによって成り立つと考えられる⁽¹⁾。

2.2 修辞作用

修辞理解のプロセスは、字義通りの意味内容を転換し、修辞的な意味をさぐるプロセスを含む。修辞的なコンテキストによって何らかの逸脱性を認知し、修辞的意味を探索するプロセスを、修辞作用 (rhetorical action) とよぶ⁽²⁾。修辞作用は、隠喩的なものと換喩的なものとが区別される。図2は、修辞作用のスキーマである。

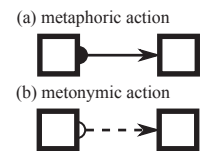


図 2: 修辞作用

(a) 隠喩的作用 (metaphoric action) は、隠喩理解に代表される認知プロセスであり、字義通りの意味内容を類似性 (similarity) にもとづいて潜在化するプロセスとして特徴づけられる。たとえば、男は狼だ、という隠喩の修辞理解では、字義通りのコピュラとしての意味は破綻しており、「男」と「狼」を意味的類似性にもとづく連合関係として潜在化する隠喩的作用がかかわる。また(2)では、字義通りの意味内容は背景化され、「かっぱ」と「かっぱらった」を音韻的類似性にもとづく連合関係として対比的に潜在化する隠喩的作用がかかわる。図2(a)の二つの四角形はそれぞれ「男」と「狼」あるいは「かっぱ」と「かっぱらった」に対応し、半円の起点をもつ実線の矢印は隠喩的作用のプロセスをあらわす。

(b) 換喩的作用 (metonymic action) は、換喩理解に代表される認知プロセスであり、近接性 (contiguity) にもとづいて文脈に沿う意味内容を顕在化するプロセスとして特徴づけられる。たとえば、漱石を読む、という換喩の修辞理解では、字義通りには逸脱的であるが、「読む」という文脈のもとでは「漱石」と近接性をもつ[作品]の概念が顕在化される換喩的作用がかかわる。図2(b)の二つの四角形はそれぞれ「漱石」と[作品]に対応し、半円の起点をもつ破線の矢印は換喩的作用のプロセスをあらわす。

2.3 言語音の概念化

言葉遊びの修辞理解では、意味が背景化され、音が前景化される。認知文法では、言語記号は音韻極と意味極の対として規定されるが、言葉遊びのように音韻形式自体の構造が問題となる場合、単純な両極構造だけでは包括的に記述することはできないと考えられる。

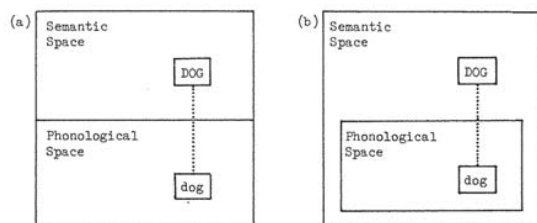


図 3: Langacker (1987: 80)

図3は、認知文法における、記号の音韻形式と意味の関係についての、二つの観点をあらわす図である。音韻空間 (phonological space) とは、人間の認知機構において音をあつかう領域であり、意味空間 (semantic space) とは、思考や概念化をあつかう領域である。(a) は、典型的な言語記号に対応する図であり、記号 *dog* の意味極は意味空間に、音韻極は音韻空間に位置づけられる。(b) では、音韻空間が意味空間に包含され、音韻極は広

い意味では意味空間に位置づけられる。音は、厳密には、知覚的な存在である。言語音の知識は多面的であり、少なくとも、聴覚イメージの観点、調音的な観点、発声の運動感覚的な観点、その聴覚フィードバックの観点からの、言語音に関する知識をもっている。この点からは「音は、少なくとも多くの言語学的目的に関しては、概念である。」(Langacker 1987: 78) 記号の音韻形式をあつかうことは、その音を概念として認知することであるという点で、広く意味空間における概念化であるといえ、より厳密には「言語記号は広い意味での意味空間における二つの構造の対応関係として定義される」(ibid., 79)。

音韻形式は、平常の言語的認知プロセスでは、意味解釈の媒体として背景化されている。しかし、音反復などにより音韻構造が前景化されるときには、音韻空間における音韻形式自体が概念化の対象となる場合がある。一般に、言葉遊びの意味の一部は、音韻空間における音韻極の概念化によって規定されると考えられる。

3 音反復レトリックの分析

本節では、具体事例に基づいて、言葉遊びの修辞表現の認知的特徴を分析し、スキーマのかたちで構造を明示する。具体的に取り上げる修辞は、異義反復、類音語接近、かすりの三つである。異義反復は、異なる意味で同語を反復することであり、音韻形式は完全に一致することもある。活用の語幹のみが一致することもある。いずれにしろ、二語が同語であることが修辞理解に必要となる。類音語接近は、部分的に共通音を含む語の並置であり、共通音は語の音韻形式の一部である。かすりは、一方の語の言語音を変容させることで、一時的に類音性をつくりだす、もじりという操作がともなうものをいう。

3.1 異義反復

異義反復 (antnaclesis) とは、同じ語を異なる意味で反復する修辞である。

(3) だが、なにひとつ手がかりはつかめなかった。つかんだのは川底の泥ぐらいなものである。

(井上ひさし「ブンとフン」: 38)

(4) あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物じゃありません、伊万里ですといった。

(夏目漱石「坊っちゃん」: 105)

(3) では、動詞[つかむ]が異なる意味で反復されている。それぞれ、行為の対象となる「手がかり」「川底の泥」のつくる文脈によって、第一文では、[みつける]という比喩的意味で、第二文では、字義通りの意味で用いられており、異義反復と理解される。(4) では、名詞「瀬戸物」が、異義反復されている。第一文では、産地を聞いていることから、陶器一般の意味で「瀬戸物」が用いられている。一方、第二文では、伊万里との対比から、瀬戸の陶器という語源的意味で用いられている。

異義反復では、二つの語が二つの異なる文脈で反復されることで、意味の差異が明確になる。(3)では、字義通りの意味と比喩的な意味、(4)では、語源的意味と俗語的な意味が問題となる。(4)ではさらに、異義反復が対話の形式をとっており、異義反復と誤解、あるいは揚げ足とりとの関連が示唆される。次の例では、慣用表現としての意味と字義通りの意味の差異が問題となる。

- (5) 骨が細く、体が細く、顔は特更^{ことさら}細く出来あがったうえに、取る年は^{あらそわ}争れぬ雨と風と苦
 労とを吹き付けて、辛い浮世に、辛くも取り留めた心さえ細くなる^{ばかり}許である。

(夏目漱石「虞美人草」：199)

- (6) 恋いにし人を、慕いし人を、その^{おもい}思の^{おもい}おもいもかけず、^{その}其夢のゆめにも知らず

(幸田露伴「一刹那」：16)

(5)では、「辛い浮世」では、世知辛い世の中の意味で用いられている。一方、同じ語が、「辛くも」では、やつとのことだという意味の慣用表現の部分となる語として用いられている。(6)では、「思」は気持ちの意味で用いられている。同じおもいという音の語が、「おもいもかけず」では、全く予想もしないという意味の慣用表現の部分として位置づけられている。慣用句は、語の構成的意味よりも句としての全体的意味が優先されることに特徴づけられるが、この種の具体事例からは、構成部分が焦点化される文脈のもとでは、慣用句としてのゲシュタルト性が低下することが示唆される。

図4は、(3)–(6)のタイプの異義反復に関するスキーマ **ANTCLA** である。Phonological Space は、音韻的解釈のドメインをあらわす。その成分構造となる要素 W_{P-1} は、修辭的焦点となる語（たとえば[つかむ]）の音韻極である。二つの要素 W_{P-1} をつなぐ対応線は、同語の反復をあらわす。 W_{P-1} の成分構造となるのは、動詞の語幹（たとえば、つかむの[つか]）のような、より小さい音韻単位の連続である。実線であらわされた要素間の関係は、語や語幹を形成している音素・モーラの連結性の認知（たとえば「つかんだ」における/tsu/と/ka/の連結）をあらわす。音連続の長さは可変的であり、スキーマでは二つの要素だけが全体の代表として表示されている。この成分構造の対応関係によって、二語の音韻論的差異は、異形態としての差異とみなされ（たとえば「つかめ」と「つかん」はつかむの異形態）、結果的に二つ W_{P-1} をつなぐ語レベルの

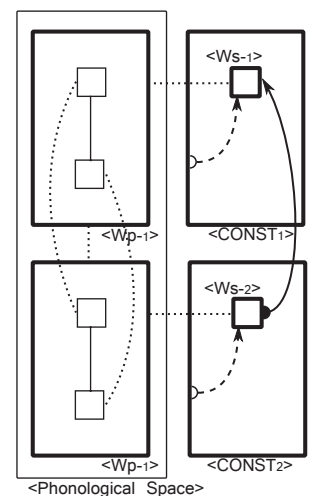


図 4: 異義反復 (ANTCLA)

対応関係が認知される。異義反復では、異なる意味をもつ同じ語を接近して用いており、音韻的な逸脱がある。この二つの意味 W_{S-2} と W_{S-1} とのあいだにはたらく隠喩的作用はこれを連合関係として潜在化し、対比的に理解する認知プロセスをあらわす。異義反復の理解が可能となるには、広義の構文がつくる文脈の差異を認知することで、二つの異なる文脈を理解する必要がある。たとえば(3)では、[てがかりをV][川底の泥をV]という二つの構文のつくる文脈の差異によって、それぞれ精緻化される[つかむ]が異なる意味となる。この種の構文的な環境による意味限定のプロセスをあらわすのが、 $CONST_1$ と $CONST_2$ から語へとはたらく換喩的作用である。この換喩的作用は、 W_{P-1}

が潜在的に連合関係をもつさまざまな多義的意味のうち、ひとつだけ（たとえば、つかむの[みつめる]という比喩的意味）を顕在化させ、意味を限定する認知プロセスをあらわす。

異義反復では、一見すると語レベルの多義性だけが問題となる。しかし実際には、語レベルを越えて、特有の修辭的効果がみられる。(3)では、手がかりを見つけることと、川底の泥をつかむことが節のレベルで対比され、成功と失敗の対比が含意される。(4)では、陶器に関する漠然とした質問と、それに対する知識的な答え、言い換えると、知識の有無が、(5)では、世知辛いこと世の中と、その中でやっとなことで生きることが、(6)では、強い気持ちと、それに全く気付かないということが、対比的に理解されるといえる。

3.2 類音語接近

類音語接近 (paronomasia) とは、意味の差異が大きく、音が類似する語を近くに並置する修辭である。

- (7) かっぱかっぱらった
かっぱらっぱかっぱらった
とってちってた

(谷川俊太郎「かっぱ」: 36)

(7)の下線部では、「かっぱ」と「かっぱらった」が並置されることで、本来意味上のつながりは無い二語が、音韻的な類似を接点として連合される。ここでは、下線部だけでなく、/appa/という音連続の反復によって、第一行と第二行の全体が類音語接近をなしているといえる。

類音語接近で特にはっきりと分かるように、同じ音が繰り返される時、音が前景化され、意味は相対的に背景化される。「言葉の表面的な音に注意が集まり、深く意味を探ろうとしない傾向が生まれる」のである(尼ヶ崎 1988: 138)。類音語接近では、異義反復と異なり、音の反復と意味の対比が並行的ではない。異義反復は、語レベルの反復である。語は意味を担う言語単位であり、多くの場合、語の反復は意味の対比をとる。一方、類音語接近では、語の反復は問題となっておらず、音の類似が焦点化される。その結果、音韻形式の解釈と意味の解釈とが対応せず、二重的になっているといえる。

次の例では、あからさまに類似音の二語が接近しているわけではない。

- (8) しかし踊子たちが傍にゐなくなると、却つて私の空想は解き放たれたやうに生き生きと踊り始めた。

(川端康成「伊豆の踊子」: 298)

(8)では、「踊子」と「踊り始めた」は一見平常の文脈にあるかのようなようであるが、後者のトピックが「踊子」ではなく「空想」にずらされることにより、二者の文脈のずれが強調され、類音語接近をなしているといえる。

比喩の媒体は色々可能であって、「踊り始めた」という媒体が選択されているところに、類音性にかかわる作為が感じられる。「踊子」と類似音をもつ述語を選んでいることによって、二語

が接近しているかのような感覚を与えると考えられる。このように、類音性の認知は、音声や文字の物理的な接近が大きな要因となる他にも、文脈によって、わりあい離れた二語も類音の印象を与え得ることがわかる。

さて、次の例では、類音語接近と異義反復の連続性が示唆される。

(9) 渋茶をすすりながら渋いカオをして、フン先生は考えた。

(井上ひさし「ブンとフン」: 49)

(10) うそつききつつき きはつつかない
うそをつきつき つきつつく

(谷川俊太郎「うそつききつつき」: 36)

(9)では、「渋茶」と「渋い」は別語であり類音語接近をなしている。しかし、「渋茶」とは渋い茶のことであるとみれば、異義反復的ともいえる。この場合には、渋い茶は字義通りの意味であり、渋いカオは慣用表現の意味となる同語の反復と解釈される。(10)の下線部では、つくの連用形「つき」と名詞「つき」とが類音語接近をなしている。動詞[つく]と名詞[つき]は同語ではない。しかし、同一の音韻極をもつ語であるという点では、同音異義的ともいえる。このように、同語であるという認識は、意味カテゴリーの慣習的体系にもとづくものであって、音にもとづくものではない。一見別語とみられるものを、比喩的拡張や語源的歴史などから広く同音異義語とするような場合では、類音語接近と異義反復とは接近していくと考えられる。

図5は、類音語接近の修辞スキーマ **PARONM** である。隠喩的作用で結ばれた二つの要素 W_{S-1} 、 W_{S-2} は、類音の二語（たとえば「かつば」「かつばらった」）の意味極である。二つの意味極が、Phonological Spaceの二つの音韻極 W_{P-1} 、 W_{P-2} と対応関係をもつ。異義反復と異なり、語レベルの音韻形式である W_{P-1} と W_{P-2} は対応関係をもたない。さらに、類音語接近では、語の音韻極の成分構造もプロファイルされている。これは、類音性の認知に関して、語レベルよりも音素・モーラレベルが焦点化されることをあらわす。また、二語の類音性は意味とは独立に認知されており、意味極における、構文からの換喩的な文脈限定の作用はみられない。

類音語接近はユーモアとしての洒落と結びつく。意味的には関連のない二語を、音の類似だけで関連させた場合、駄洒落の感覚が生じる⁽³⁾。

(11) (….)ありていに申せば、ニコ狎先生の顔は^{チン}狎に似ている。狎に似ているから珍妙である—などと、私は洒落^{しやれ}で言っておるのではない。

(織田作之助「ニコ狎先生」: 131)

(11)では、「狎」と「珍妙」が類音語接近をなしている。しかし、話し手の意図は、文脈上、まじめに言ったらたまたま駄洒落的になってしまったということであり、これを後続表現で「私は

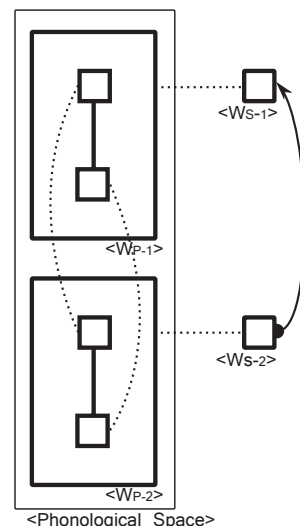


図 5: 類音語接近 (PARONM)

おこなわれる。これをあらわすのが、 W_{P-2} から W_{P-3} への隠喩的作用である。 W_{P-3} は元の音韻形式をあらわす。かすりでは、プロファイルされた W_{P-2} ではなく、隠喩的作用の趣意となる W_{P-3} が意味極と対応関係をもつ。つまり、かすりでは、音と意味との記号化の関係は間接的なものとなっているといえる。もじられた語の意味極 W_{S-2} は、構文的な文脈によって復元されるものであり、換喩的作用はこのプロセスをあらわす。

かすりは、基本的に元の語からのもじりによって成り立つ修辞表現である。言い換えると、もじられた語から元の語にあたるものが復元されることが、かすりの理解には必要となる。これにたいし、次の例では、「もじられた」語は新語であり、元の語との対比によってかすりと類似の修辞的效果がみられる。

- (14) もはやここまで来れば、先生の所業は乱暴を通り越して、狂気の沙汰である。いわば オステリ である。女なら ヒステリ というところだが、男だからオステリというのである。

(織田作之助「ニコ狎先生」: 135)

(14) では、「オステリ」は、提示される第二文の時点では、その意味が分からない。しかし、続く第三文によって、かすりの根拠が明示され、また「ヒステリ」からのもじりとして「オステリ」という語を創出していることが理解される。また、この例では、形態素分割にかかわる修辞性もみられる。ここでは、男のヒステリの意味で「オステリ」というわけであるが、「オス」は男を暗示する接頭辞として用いられている。これにたいし「ヒス」は特に女を暗示するわけではない。ヒステリは本来複合語ではないわけで、ここではかすりによって、形態素が分断され、「ヒステリ」に関する疑似的な接頭辞的解釈を誘引しているものと考えられる。

4 音反復レトリックのネットワーク

前節では、言葉遊びに関わる修辞である異義反復、類音語接近、かすりの認知的メカニズムを、具体事例とともに分析した。修辞学による修辞分類にもとづく分析は、修辞のカテゴリーが独立に存在しているかのような印象を与える。しかし、言語使用の主体は、必ずしもこの種のカテゴリーを常に区別するわけではない。日常会話において洒落の感覚を認めた時、類音性の認識はもったとしても、修辞のカテゴリーに関する認識は稀であると考えられる。修辞のカテゴリーは、修辞学的分析のための指標であって、言語主体のカテゴリー認識をあらわすものではない。修辞表現に関する言語主体のカテゴリー認識はより流動的であり、連続的であると考えられる。本節では、ネットワークモデル (network model) にしたがって、前節で得られた修辞のスキーマの相互関係を、言語主体のカテゴリー化の認知プロセスの観点から明示的に表現していく。

修辞のスキーマは、具体的な修辞表現を具体事例としてとりまとめるものであるという点で、相対的に具体性の低い、抽象的認知構造をあらわすものであるといえる。多様な修辞スキーマの中でも、具体性 (specificity) には差異がみられる。図7は、言葉遊びの修辞のネットワークである。実線の矢印は、具体性の低いスキーマが、具体性の高いスキーマを、具体事例としてとりこむ事例化 (instantiation) のプロセスをあらわす。図7では、類音語接近のスキーマ **PARONOM** は、異義反復のスキーマ **ANTACLA** と事例化の関係にある。なぜならば、両者の構造的相違は、

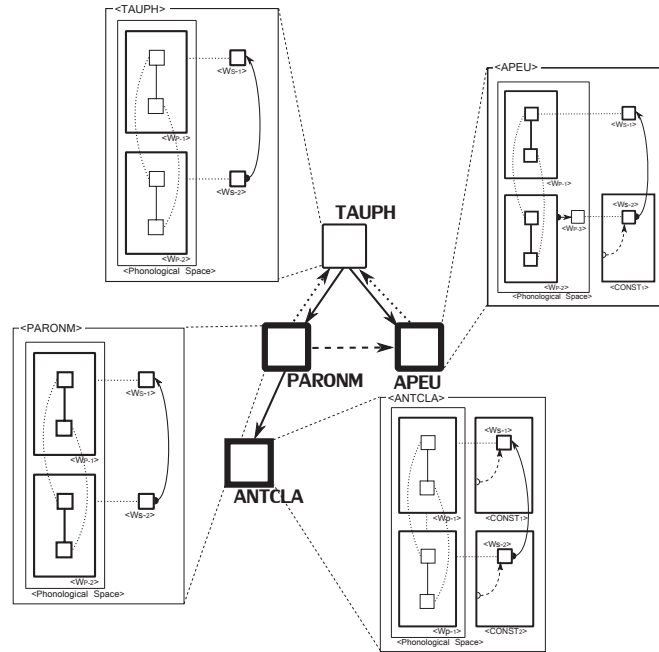


図 7: 音反復レトリックのネットワーク

音韻空間における語レベルの音韻極の対応関係の有無と、語レベルの意味極を特徴づける構文的環境の有無だけであり、**ANTCLA** は基本的に **PARONOM** の構造を矛盾なく継承しているからである。この点から、異義反復という修辞は、類音語接近によって基本的に特徴づけられ、その音韻、意味構造をさらに精緻化したものとみることができる。点線の矢印は、具体性の高いスキーマから、より抽象的な構造をもつスキーマを構成するスキーマ化 (schematization) のプロセスをあらわす。図7では、類音語接近のスキーマ **PARONOM** とかすりのスキーマ **APEU** から、同音語反復 (tautophony) のスキーマ **TAUPH** が構成されている。**TAUPH** の修辞的構造は、本論文でとりあげた三つの修辞の共通特徴を要約するものであるといえる。すなわち、音韻空間における語よりも小さいレベルの音韻極の対応関係に動機づけられて、語レベルの意味極が対比的に認知されることが、三つの修辞の共通特徴といえる。破線の矢印は、より抽象的なスキーマに動機づけられて、プロトタイプのスキーマからは周辺的とみられる事例を拡張事例としてとりこむ拡張 (extension) のプロセスをあらわす。かすりのスキーマ **APEU** は、音韻空間において、変異的な音形を平常の音形に代置するプロセスを経て、意味極の対比がなされるという点で、**PARONOM** とは拡張の関係にあるといえる。この拡張関係は、両者とも音韻空間における類音性の認知にもとづくという点で、**TAUPH** の構造を媒介としているといえる。

図8は、具体事例にもとづいて構成されるスキーマのネットワークにおいて、音反復にかかわる修辞学的カテゴリーがどのように分布するかを視覚的に表現するものである。スキーマネットワークによる修辞カテゴリーの規定は、言語主体のカテゴリー認識を反映するものである。これに対し、修辞学的なカテゴリーは、スキーマネットワークにおけるクラスター (すなわち、スキーマの局所的偏り) の分布として規定することができる。図8の点線の領域は、修辞学的分類が、ネットワーク上にどのように分布するかをあらわすものである。このように、ネットワーク上に修辞学的分類を領域として表現することで、大域的なカテゴリー関係が直感的に理解され

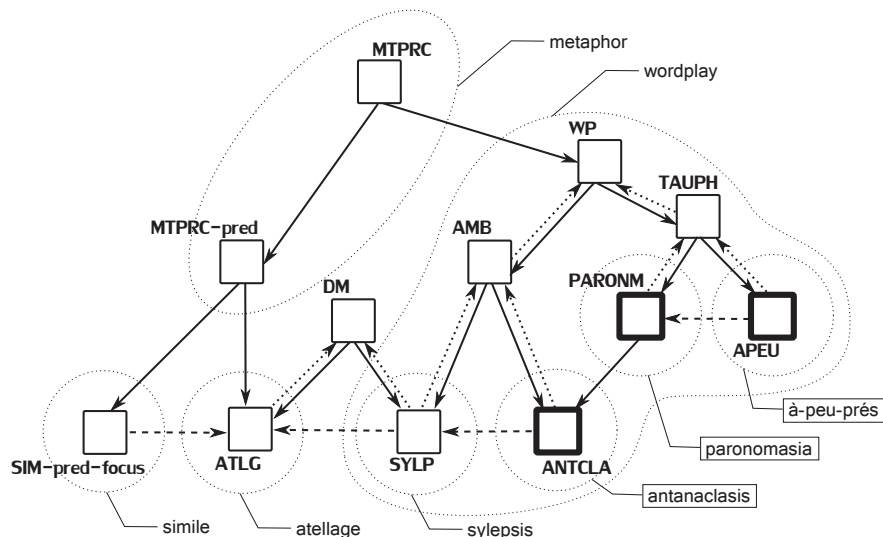


図 8: 音反復レトリックの分布

る。スキーマ **MTPRC** と **MTPRC-pred** を囲むカテゴリー領域は、隠喩 (metaphor) の分布をあらわし、スキーマ **WP** をはじめとするスキーマを囲むカテゴリー領域は、言葉遊び (wordplay) の分布をあらわす。**MTPRC** と **WP** のあいだに事例化の関係が存在することによって、隠喩と言葉遊びには関連があることが視覚的に表現されている。個々のスキーマの具体的構造に関しては小松原 (2012) を参照。

5 類音性と意味の背景化

言葉遊びの遊びといわれる所以は、音の前景化にあるといえる。遊びのない言葉遣いでは、音は単に意味を運ぶ媒体として、理解の過程では背景化されている。しかし、音韻的な類似性は、音韻形式の透明度を下げ、音あるいは文字そのものの性質を浮き彫りにする。佐藤信夫は、言葉遊びに関して、「ことばを一種異物として感じる、ことばを一種自己目的的な存在物として感じる」言語感覚という (佐藤 1986: 54)。言葉遊びの修辞表現において、音は意味を介する道具として人間に従属することをやめ、自律的な存在感をとりもどす、という比喻も可能であろう。

異義反復では、音韻形式は二つあるが、音韻的類似性は非常に高い。二つの音韻形式のゆらぎは、異形態として理解される範囲内にとどまる。類音語接近では、音韻的類似性の高い別語が並置される。ここで、音の類似は意味の類似を離れる。多義は、何らかの意味的接点をもつのにたいし、単なる音の類似は、意味的接点をもつ必要は無いのである。かすりでは、音韻的類似性は、作為によって生じる。音韻形式の変容は、解釈主体の音への注意を引き付け、音と意味はますます遠ざかっていく。このように、音韻的類似性を生じる原因が、意図的であればあるほど、意味と音とは剥離していく。言葉遊びの修辞的表現では、音韻的解釈と意味的解釈は、独立的におこなわれるといえる。ここでとりあげた修辞では、語のレベルと音素・モーラのレベルが、並列的に多層的となる。

語は意味を担う言語単位であり、音素は語を識別する言語単位である。言語音の差異を認知することが語の弁別であるとすれば、言語音の類似を認知することは語の混同であろう。音の

類似の濫用は、別語の混同を誘引する。別語を混同すれば、意味は破綻する。語の弁別が言語音の仕事であるとすれば、語の混同が言語音の遊びであるというギローの定義は、言い得て妙である。言語音の仕事をもとめる言語主体の注意は、音の類似性に引き付けられ、言語音は平常、意味論に束縛されている意味から一時的に解放されるのである。

注

- (1) ヤーコブソンの詩的機能に関する主な研究のひとつは、押韻 (rhyme) の研究である。音象徴、押韻、言葉遊びは、すべて音反復と密接なかかわりをもつという点で、言語の詩的機能にかかわると考えられる。
- (2) 修辞理解の修辞作用モデルについては、小松原 (2012) でより詳細に規定している。
- (3) 駄洒落の認知的研究に関しては、Kawahara and Shinohara (2009), Kawahara (2009) も参照。

引用例出典

- [1] 井上ひさし. 1974. 『ブンとフン』 東京: 新潮社.
- [2] 織田作之助. 1988/1945. 「ニコ仲先生」『おかしい話』: 129–143. 東京: 筑摩書房.
- [3] 川端康成. 1980/1926. 「伊豆の踊子」『川端康成全集第二巻』: 293–324. 東京: 新潮社.
- [4] 幸田露伴. 1952/1889. 「一刹那」『露伴全集第一巻』: 1–21. 東京: 岩波書店.
- [5] 谷川俊太郎. 1993/1973a. 「うそつききつつき」『続・谷川俊太郎』: 36. 東京: 思潮社.
- [6] 谷川俊太郎. 1993/1973b. 「かつぱ」『続・谷川俊太郎』: 36. 東京: 思潮社.
- [7] 夏目漱石. 1929/1906. 『坊っちゃん』 東京: 岩波書店.
- [8] 夏目漱石. 1956/1907. 「虞美人草」『漱石全集第五巻』: 3–316. 東京: 岩波書店.

参考文献

- [1] Guiraud, Pierre. 1979/1976. 『言葉遊び』 東京: 白水社. 中村栄子訳.
- [2] Jakobson, Roman. 1960. Closing statement: Linguistics and Poetics. in *Style in Language*. 350–377. Cambridge: The MIT Press.
- [3] Jakobson, Roman. 1981/1956. Two aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances. in *Fundamentals of Language*. 55–82. Berlin: Mouton, The Hague.
- [4] Kawahara, Shigeto. 2009. Probing Knowledge of Similarity Through Puns.
- [5] Kawahara, Shigeto, and Kazuko Shinohara. 2009. The Role of Psychoacoustic Similarity in Japanese Puns: A Corpus Study. *Journal of Linguistics* 45(1) 111–138.
- [6] Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar: Volume I Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- [7] 尼ヶ崎彬. 1988. 『日本のレトリック–演技する言葉』 東京: 筑摩書房.
- [8] 小松原哲太. 2012. 「修辞理解のメカニズムに関する基礎的研究 —転義現象の分析を中心に—」 京都大学 人間・環境学研究科 修士論文.
- [9] 佐藤信夫. 1986. 『言述のすがた–《わざとらしさ》の修辞学』 東京: 青土社.
- [10] 佐藤信夫・佐々木健一・松尾大. 2006. 『レトリック事典』 東京: 大修館書店.

A Cognitive Analysis of Wordplay in the Rhetoric Network

Tetsuta KOMATSUBARA

Kyoto University, Graduate School

Abstract

We often engage in wordplay in daily conversations, but there are not so many studies on it in linguistics. The main target of linguistics has always been grammar, and studies of figurative language including wordplay are never satisfactory. The objective of this paper is a cognitive analysis of three kinds of wordplay, antanaclasis, paronomasia and *à-peu-près*, in the theoretical background of Cognitive Grammar. Antanaclasis is defined as repetition of same word in different senses, paronomasia as repetition of same sound in different words, and *à-peu-près* as generation of sound similarity with a parody.

The main results of this paper are the followings: (i) The cognitive processing of similarity is observed not only in semantic domain but also in phonological domain, and these processes have some common character. (ii) Metaphor is related to wordplay. (iii) In the cognitive process of wordplay, the phonological pole of a repetitive word is foregrounded, and its semantic pole is relatively backgrounded. (iv) Antanaclasis is related to misunderstanding or finding fault. (v) Antanaclasis can reanalyze an idiomatic phrase as a whole into word level components. (vi) Paronomasia can shorten the psychological distance between words which have similar phonological structure. (vii) Cognition of paronomasia can be cancelled pragmatically. (viii) On the other hand, cognition of *à-peu-près* cannot be cancelled pragmatically. (ix) These three rhetorics are not discrete but continuous. (x) Wordplay can relieve a word from its ordinary semantic relation, and enable the sound to function as conceptual content.